

コンテンツの評価の事例

ソニー株式会社 ソフトウェア資産の取扱いについて

5. 繰延映画製作費

繰延映画製作費の内訳は次のとおりです。

3月31日現在	単位:百万円		単位:百万米ドル
	2005年	2006年	2006年
映画作品:			
既公開(取得ライブラリーを含む)	¥119,438	¥153,992	\$1,316
完成 未公開	11,358	13,377	114
製作・開発中	118,271	156,019	1,333
テレビ番組:			
既公開(取得ライブラリーを含む)	29,894	36,918	316
製作・開発中	—	66	1
	¥278,961	¥360,372	\$3,080

ソニーは、2006年3月31日現在の既公開作品(取得ライブラリーに配分された金額を除く)にかかる未償却残高のうち約88%が、3年以内に償却されると見積もっています。また、2006年3月31日現在の既公開作品にかかる繰延映画製作費のうち約102,207百万円(874百万米ドル)が1年以内に償却される予定です。2006年3月31日現在の取得ライブラリーにかかる未償却残高約10,820百万円(92百万米ドル)が、平均残存年数4年で均等償却される予定です。また、未払金・未払費用に含まれる未払分配金債務約137,400百万円(1,174百万米ドル)は1年以内に支払われる予定です。

10. 営業権および無形固定資産

2006年3月31日に終了した1年間に取得した無形固定資産は、36,237百万円(310百万米ドル)で、これらは償却を行っており、主なものは特許権9,922百万円(85百万米ドル)および販売用ソフト

ウェア17,653百万円(151百万米ドル)です。特許権および販売用ソフトウェアの加重平均償却年数は、それぞれ8年および3年です。

償却対象の無形固定資産の内訳は次のとおりです。

3月31日現在	単位:百万円				単位:百万米ドル	
	2005年		2006年		2006年	
	取得原価	償却累計額	取得原価	償却累計額	取得原価	償却累計額
アーティスト・コントラクト	¥ 15,218	¥(11,094)	¥ 15,218	¥ (12,218)	\$ 130	\$(104)
ミュージック・カタログ	65,674	(19,641)	71,921	(24,012)	615	(205)
特許権	55,173	(26,139)	67,467	(30,200)	577	(258)
販売用ソフトウェア	31,907	(16,181)	40,007	(24,194)	342	(207)
その他	27,648	(11,625)	40,978	(15,133)	350	(130)
合計	¥195,620	¥(84,680)	¥235,591	¥(105,757)	\$2,014	\$(904)

2004年3月31日、2005年3月31日および2006年3月31日に終了した各1年間における無形固定資産償却費は、それぞれ28,866百万円、24,993百万円および28,390百万円(243百万米ドル)です。また、翌年度以降5年間の見積償却費は次のとおりです。

	単位:百万円	単位:百万米ドル
3月31日に終了する各年度		
2007年	¥31,636	\$ 270
2008年	24,862	212
2009年	18,857	161
2010年	15,593	133
2011年	9,125	78

耐用年数が確定できない無形固定資産の内訳は次のとおりです。

3月31日現在	単位:百万円		単位:百万米ドル
	2005年	2006年	2006年
商標	¥57,195	¥58,195	\$497
配給契約	18,848	18,848	161
	¥76,043	¥77,043	\$658

AICPA SOP00-2 抜粋

Statement of Position 00-2 Accounting by Producers or Distributors of Films American Institute of Certified Public Accountants June 12, 2000
SOP 00-2 「映画及びテレビ番組の製作者または配給者にかかる会計基準」 米国公認会計士協会 2000.6.12

- 28 The costs of producing a film and bringing that film to market consist of film costs, participation costs, exploitation costs, and manufacturing costs.**
映画の制作及び市場流通のためのコストには、フィルム費、関係諸費、広告宣伝費及び制作費が含まれる。
- 29 An entity should report film costs as a separate asset on its balance sheet. An entity should account for interest costs related to the production of a film in accordance with the provisions in FASB* Statement No. 34, Capitalization of Interest Cost.**
事業者は、フィルム費を独立した資産として貸借対照表上に標記すべきである。FASB (Financial Accounting Standards Board (財務会計基準審議会)) Statement No.34 (関連コストの資産化)の規定に従い、事業者は映画の制作に関連したコストを説明すべきである。
- 33 For an episodic television series, the following additional guidance for film costs applies. Ultimate revenue for an episodic television series can include estimates from the initial market and secondary markets, as discussed in paragraph .39(b). fn 2 Until an entity can establish estimates of secondary market revenue in accordance with paragraph .39(b), capitalized costs for each episode produced should not exceed an amount equal to the amount of revenue contracted for that episode. An entity should expense as incurred film costs in excess of this limitation on an episode-by-episode basis, and an entity should not restore such amounts as film cost assets in subsequent periods. An entity should expense all capitalized costs (including set costs) for each episode as it recognizes the related revenue for each episode. Once an entity can establish estimates of secondary market revenue in accordance with paragraph .39(b), the entity should capitalize subsequent film costs. An entity should amortize such capitalized film costs in accordance with the provisions in paragraphs .34 through .37, and it should evaluate such costs for impairment in accordance with paragraph .44.**
- fn 2 In this context, initial market is the first market of exploitation in each territory, whether that market is a broadcast or cable television network, first-run syndication, or other. Secondary markets are any markets other than the initial markets.**
継続的なテレビシリーズでは、フィルム費に対して以下の追加ガイダンスが適用される。39(b)において議論されているように、継続的なテレビシリーズの最終的な収入は、最初の市場と二次利用市場の合計から評価することができる。〔※脚注2〕39(b)に従って事業者が二次利用以降の収入の見積りが可能になるまでは、各エピソードごとに支出されたコストは、当該エピソードの契約上の収入額を超えるべきではない。事業者は、この「エピソードごとの原則」に基づく限度を超過する分について費用計上すべきであり、また、フィルム費資産として計上されたものを次期に残すべきではない。事業者は、それぞれのエピソードによる収入について評価するとともに、エピソードごとに全ての資産化費用(セット費用を含む)を費用計上するべきである。事業者がひとたび39(b)に沿って続編以降のシリーズの収入見積もりを確立することが可能となれば、そのフィルム費用を資産化すべきである。34～37の条項に沿って、事業者はそのような資産化したフィルム費用を償却するべきであり、そして、44に沿って、減損費用を評価するべきである。

※脚注2 ここで最初の市場とは、放送、ケーブルテレビ、初公開のためのシンジケーションその他にかかわらず、それぞれの領域のうち、最初に利用される市場を指す。続編以降の市場とは、それ以外のあらゆる市場を指す。

- 112 AcSEC acknowledges that the ten-year provision is arbitrary and that many films have lives that extend beyond ten years. AcSEC is concerned, however, about diversity that has arisen in the industry with respect to the estimation of ultimate revenue. AcSEC concluded that such a limitation is needed to provide greater comparability within the industry. AcSEC also notes that, in most instances, the significant majority of a film's revenue will have been earned within the ten-year period.**

AcSEC (Accounting Standards Executive Committee (会計基準執行委員会))は、10年条項の採用は任意であり、多くのフィルムが10年以上続く価値をもつことを認める。しかしながら、AcSECは最終的な収入の見積りにあたり、その産業において形成されてきた多様性に注目している。AcSECは、産業の中でよりよい比較可能性を提供するためには、そのような制限が必要であると結論づけた。また、AcSECは、映画から得られる収入は、10年以内にかかなりの部分を得ることができると指摘する。